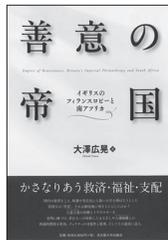


書評と紹介

大澤広晃著

『善意の帝国』

——イギリスのフィランソロピーと
南アフリカ』



評者：前川 一郎

本書は、19世紀後半から二つの世界大戦に至る帝国主義の時代、南アフリカにいた「非白人」らの境遇の悪化と悲惨さに寄り添った、「善意」に満ちた人びとの物語である。

読み終えたあと、嘆息した。深い余韻と、あらゆる種の疲労感が残った。

もっとも、疲労感は大部のゆえではない。支配者側に属した「リベラルな白人」たちが「非白人」へと向けた「善意」に、まるで濡れ落ち葉のように人種主義が絡みつき、自家撞着を繰り返しながら正しいことをしているかのように作動していく。その不穏な過程を史料に即して執拗に追いかける叙述に、読者の視線が引きずり込まれるからである。

不穏なのは、支配者たるイギリス人や現地白人の言動だけではない。支配と被支配のはざまにおかれ、「西洋化」を貪欲に取り入れたアフリカ人エリートまでもが、その「善意」を頼みに、現状を変えようとするほかない厳しい現実が生々しく描かれている。そしてその努力が、結局は幻想として剥ぎ取られ、かのアパルトヘ

イトへと接続していく——この結末を知らながら読む読者は、いっそう複雑な感情を抱かざるをえない。

本書が描くのは、そうして「善意」があだとなり、人間の尊厳を奪っていく植民地後継国家、南アフリカ建国の歴史である。

当時、南アフリカ戦争（1899-1902）を戦ったイギリス系とアフリカーナーは、早急に和解して「秩序」を取り戻さねばならなかった。最大の争点となったのは、「原住民問題」である。「原住民“の”問題」ではない。少数白人が圧倒的多数の先住アフリカ人をいかに統治するかという、あくまでも支配者側の都合に属した案件であった。

著者が焦点を当てるのは、この「原住民問題」に向き合い、アフリカ人ら「非白人」の境遇に寄り添い、かれらの「伝統」的な生き方や生活の「保護」と「福利の向上」に希望を託した人びと、すなわち「帝国フィランソロピー」を担ったアクターたちである。イギリス帝国を舞台に発動された「善意」とは、いったい何だったのか——本書はこの問いを、イギリスと南アフリカの両側から複眼的に追究する。

本書については、本稿執筆時点ですでに『史林』第108巻4号（2025年）に堀内隆行による書評があり、イギリス帝国史と国内史を架橋せんとする本書のねらいも丁寧に紹介されている。著者自身も、現代的関心と結びつけて自著を紹介するインターネット記事を執筆している（All Reviews）。今後も多くの書評が問われることだろう。以下本稿では、屋上屋を架すことのないようにと願いつつ、まずは評者の関心にそって各章の内容を紹介し、若干の各論的疑問を示し、そのうえで本書がもつ研究史上の意義

や残された課題などについて考えてみたい。

本書は、第Ⅰ部「イギリス」と第Ⅱ部「南アフリカ」にそれぞれ3章ずつ、序章と終章とを合わせて全8章、466頁に及ぶ大部である。

序章「帝国の善意」は、概念、課題、方法、先行研究、全体構成を提示する。著者曰く、帝国フィランソロピーとは、帝国の版図に組み込まれた地域にいた非白人に対する抑圧や搾取を批判し、先住民らの生活のありかたや「伝統」を「保護」し、かれらの「福利の向上」を目指す理念と実践であるという。著者は、そうした理念と実践にコミットした個人や団体からなる帝国フィランソピストらのあゆみを、先行研究を広く渉猟し、これまで十分に顧みられてこなかった史料も駆使しながら描いている。読者は以下の諸章をつうじて、イギリスや南アフリカに留まらず、アメリカ合衆国を含む帝国フィランソロピーのネットワークが、19世紀末から二つの世界大戦を経て連綿と紡がれていく軌跡をたどることになる。

第1章「「資本家」を糾弾する——一九～二〇世紀転換期の原住民保護協会」は、南アフリカ戦争前後の原住民保護協会（APS）の活動を軸に、帝国フィランソピストらが鉱山資本の暴力的搾取を批判しつつも、その枠内で「原住民保護」を語り直していく過程を描く。著者は、アフリカ人鉱山労働者の処遇や土地問題などが、APSの調査やロビー活動の対象となり、政府や世論を動かすための言説が形成されていく様子を、豊富な書簡や報告書に基づき跡づけている。

著者が繰り返し強調するのは、APSの活動がたんに帝国の「良心」を表象するものではなく、アフリカ人を「勤労」へと導くべき存在——規律化・訓練の対象——として定位する点である。資本主義的労働市場への組み込みその

ものは前提とされ、批判の矛先は「過度の搾取」や「不当な扱い」に向けられていたにすぎない。史料から浮かび上がるこの分析は、帝国フィランソロピーと資本主義的労働秩序の結びつきを示す証左として重要である。

であるだけに、本書の射程といわゆる人種資本主義研究との対話が、やや概念的な言及に留まっているようにみえるのが惜まれる。賃金労働をつうじた構造的暴力と人種主義を徹底的に論及してきた南アフリカ社会経済史研究者らがこれをどう読むか、もう一段踏み込んだ検討があってもよかったのではないか。

続く第2章「「救う側」の論理、「救われる側」の不满——草創期の反奴隷制および原住民保護協会」は、1909年にAPSと内外反奴隷制協会が合併し、反奴隷制および原住民保護協会（ASAPS）が成立する過程をたどりながら、第一次世界大戦期から国際連盟期にかけて、「救済」と「統治」をめぐる議論が帝国フィランソロピーの内容を深めると同時に、「原住民保護」が支配のレトリックとして政治に組み込まれていく過程を丁寧に描いている。

気になった点が二つある。第一に、章題に掲げられた「「救われる側」の不满」が、主としてASAPSの内部文書やイギリス側の記録をつうじて再構成されていることである。史料上の制約や論旨のうえからやむをえなかったとしても、アフリカ人指導者や団体の声明、請願、ローカル紙面などから、より直接的な「救済される側」の声を前景化する余地はなお残されているように思われた。

第二に、後段でも触れるが、「信託」や「保護」の言説が、マフムード・マムダニが『市民と臣民』（1996）で示した「二重国家 bifurcated state」論——「保護」を名目とした法的・政治的・領域的隔離の構図——とどう接続されるのかについて、明示的な議論がやや不

足しているようにみえることである。本書の最重要論点の一つが「保護」と「隔離」と「統治」の結びつきにある以上、マムダニの強力な議論への応答は不可欠であり、よって本書の主張もより強化されるはずである。

第3章「救済をめぐる同床異夢——戦間期の反奴隷制および原住民保護協会」は、戦間期ASAPSを舞台に、帝国フィランソロピーが国際連盟やILOなどの議論と結びつき、「救済」をめぐる多様なアクター間の関係を織り上げていく様子を詳細に浮かび上がらせている。

重要なのは、ASAPSの一部はたしかに鉱山や農場での過酷な労働実態を批判し、政府に対立的な態度を示すことがあったものの、著者も繰り返し述べるように、全体としては穏健路線に留まり、政府の政策枠組みそのものを根本から問い直したわけではなかったことである。

であるので、章題の「同床異夢」という語が、いったいどのような側面を強調しようとしているのか、頁をめくり返して考えないわけでもなかった。諸アクターの多様性を示す意図は理解できるとしても、このフレーズがもつ相対的対等性のニュアンスが独り歩きし、物語の背景に横たわる圧倒的な権力勾配までを相対化してしまう恐れはないだろうか。この時期にASAPSにとって厄介な存在であった産業商業労働組合(ICU)や鉱山ストライキそのものへの検討が、本書においてはやや手薄に映る点ともあいまって、少し気になった。

第4章「隔離と科学——ヨーロッパ人・アフリカ人協議会の誕生」からは、第Ⅱ部「南アフリカ」に移る。著者は視点を南アフリカへと転じ、ヨーロッパ人・アフリカ人協議会(以下、協議会)の設立と、その周囲に集まった専門家ネットワークの活動を中心に分析する。

本章では、「科学」としての分類学や社会調査が、「原住民保護」と「隔離」を正当化する

知的装置として機能した過程が詳細に描かれている。アメリカ合衆国のフィランソロピー財団や国際的な社会科学ネットワークとの接触が、ASAPSの言動に影響を与えた点は、著者が強調するトランスインペリアル／トランスナショナルな視座の要である。著者は、協議会をグローバルな知的空間の結節点として位置づけることで、南アフリカの人種「科学」と社会政策が世界的知的空間の一部であったことを示している。

だが、評者としては、こうした国際回路の意義を本書の中心軸としてどこまで論じうるかについては、いったん留保しておきたい。南アフリカの人種隔離政策と社会学は、著者も頻繁に引用するソウル・デュボウをはじめ多くの研究が示すように、国内の政治力学と経済構造からも十分に説明されるものであり、国際的ネットワークはその一部を補完する要因に留まる可能性が否めないと思われるからである。

第5章「包摂と隔離のあいだ——一九二〇～三〇年代前半のヨーロッパ人・アフリカ人協議会」では、都市のアフリカ人居住区、衛生、教育、福祉政策、農村開発など、協議会が関与した諸政策が取り上げられ、「包摂」と「隔離」が揺れ動くありようが具体的に検討されている。著者は、協議会が生活改善や教育機会の拡大を志向しつつも、法的・地理的隔離を前提とした「保護」の枠をけって超えなかったことを強調する。本章は、そのように「保護」の理念が行政実務に落とし込まれるプロセスを具体的に明らかにする点で貴重である。

とはいえ、「包摂」の側面がやや強調されすぎている感もある。南アフリカにおける「原住民政策」は、土地法や原住民法に象徴されるように、制度的隔離と労働力搾取を支える装置として機能していた。アフリカ人の側からみれば、その事実は「包摂」の側面と比べ物になら

ないほど重い。結局のところ、協議会の言動は、アフリカ人の生活世界にどこまで実態ある影響を及ぼしえたのだろうか。

本書のあとがきで著者が述懐しているように、アフリカの歴史を語るなら、最終的に決定的なのはアフリカの人びとの経験である。

この自明だが、少なからぬ帝国史研究者が長年にわたって困難を抱えてきたといえそうな方法上の問題を、イギリス帝国史研究者の末端に連なる評者自身もまた、自戒を込めて考えざるをえなかった。

第6章「広がる可能性、閉ざされる未来——一九三〇年代後半～四〇年代のヨーロッパ人・アフリカ人協議会」は、この時期に「人種」を超えた共存の「可能性」がいかに閉ざされていたのかを検討する。著者は、協議会周辺の専門家や政治家が限定的ながら「人種」間の「平等」や包摂的な「福祉」を構想していた点に光を当て、その可能性がアパルトヘイト成立によって潰えたという物語を提示している。

その書きぶりには魅力を感じるが、「広がる可能性、閉ざされる未来」という構図は、白人リベラルの視点からみた「未完の自由主義」の語りとしては説得的でも、はたしてその「可能性」を語りうる客観的状況がどこまで存在しえたのかと、やはり疑問を抱かざるをえない。

ここは『史林』書評で堀内が、著者が強調する「南アフリカ主義」の内実に疑問を呈したくんだりとも通底しているように思われる。評者も堀内と同様の違和感を共有する。終章「善意のゆくえ」で、著者は「善意」が隔離の方便となるメカニズムを整理し、そこに帝国フィランスロピーの歴史的意義を見出しているだけに、なおさら疑問は残る。

以上、各章の内容を紹介し、各論的疑問を示してきた。むろん、疑問は本書の意義に疑いを

差し挟むものではない。本書は、イギリス帝国史と南アフリカ史の研究双方に大きな足跡を残す労作である。「善意」の言動を歴史化し、支配の現実を鋭く可視化するための足場を提供している。読者がその足場から何を見出し、どこまで踏み込むのか——それこそが本書が投げかける最も根源的な問いであろう。以下、評者なりの受け止めに三点にわたり整理し、書評の責めを塞ぎたい。

第一に、本書読後に評者が最も強く抱いた問題関心は、植民地化の歴史を論じることの困難さである。いったい植民地化とは、圧倒的な権力勾配の現実があり、そのもとで土地、労働、制度、言語、あるいは記憶といった内心の側面にまで、人びとの生活の深部に作用するさまざまな変化が生じて、最終的には人びとの自己決定権が奪われていく歴史過程にほかならない。したがって本書が、「善意」が暴力と隔離の方便へと転じるさまを丹念に描き出している点は、古くて新しい問題系をアップデートする研究史上の重要な貢献であると思われる。

だが同時に、「救済する側」の視点が豊富な史料によって厚く描かれるほど、「救済される側」の経験や感情は相対的に薄まらざるをえない。これは本書が依拠する史料群の性格や論旨の都合上避けがたいものではあるが、それだけに、植民地主義史全体のなかで本書が扱う素材をどう位置づけるかについては、読者には一定の慎重さが求められる。

誤解を恐れずにいえば、帝国を舞台に発動されたという「善意」は、植民地主義史のメインストーリーではなく、支配する側に立つ者の悪意なき思い込み、あるいは著者がいうところの「可能性」が編成され、制度の現実へと沈殿していく過程を描くサブストーリーとしてこそ、その意義が最も的確に読み取られる、というのが評者の見立てである。

第二に、本書を貫くテーゼについてである。本書は、「保護」が隔離の方便となるという論点を、帝国フィランソロピーの活動をつうじて実証的に跡づける。ここに本書が描く世界観を理解するカギがある。

しかし、この「保護→隔離」テーゼ自体は、先に触れたマムダニをはじめとする内外の研究によって、すでに明確に提示されてきたものである。本書の独自性は、「保護→隔離」の発見そのものではなく、それを南アフリカとイギリスにまたがる帝国フィランソロピーという具体的な文脈に置き直し、丁寧な史料読解によって歴史として肉づけした点にある。

第三に、本書はじつに多くの課題を読者に突きつける。上の二点をさらに先へ進めるなら、帝国フィランソロピーとアフリカ人側の抵抗、あるいは生活の持続と再編との関係を、いっそう精密に検討する必要がある。人種資本主義研究との対話も避けて通れない。また、著者自身が示唆するように、本書の議論は今日の人道支援や国際 NGO、そしておそらく「グローバル市民教育」といった問題系とも接続しうる。

本誌の読者にとっても、「善意の帝国」はけっして遠い物語ではない。労働、福祉、移民、難民といった現代の社会問題は、「善意」に満ちた施策やキャンペーンの名のもとで、管理と排除の再編へと絡め取られることがある。本書が描く帝国フィランソロピーの歴史は、そのような「いま、ここ」を批判的に読み解くための鏡像として機能しうる。

紙幅が尽きた。内外の関連研究との比較、たとえば金澤周作の『チャリティの帝国——もうひとつのイギリス近現代史』（岩波書店、2021年）やアラン・レスターやゾウィ・レイドロウらの入植植民地主義と人道主義の研究に照らした本書の意義、さらに帝国史と国内史、トランスインペリアル・ヒストリーをめぐる近年の議論とのかかわりにも触れたいと思うが、もはや別に譲るほかない。

だが、本書が読者に残すものは、論じるべきテーマの豊富さだけではない。支配者が「善意」を語り、制度を守る方便となり、隔離が「秩序」と化す。その過程で、誰の声が掻き消され、何が当然とみなされ、どれほどの人間の尊厳が損なわれていったのか。頁を閉じたのち、だれもが大きな嘆息を避けられないであろう問いがここにある。

少なくとも評者にとって、これこそ本書を読み終えたあとに襲われた、あの余韻と疲労感の正体であった。この労作がわたしたちに託した最も重い宿題に、評者は怖気づいてしまったのである。

（大澤広晃著『善意の帝国——イギリスのフィランソロピーと南アフリカ』名古屋大学出版会、2024年12月、vi + 378 + 80頁、定価：本体6,800円＋税）

（まえかわ・いちろう 大阪大学大学院人文学研究科教授）